

自然災害とダークツーリズム

—東日本大震災とパキスタン地震の被災地を巡る—

菅原 達也*・安本 宗春**

Natural disasters and Dark Tourism:
Visit the disasters areas of Great East Japan Earthquake and Pakistan Earthquake

Tatsuya SUGAWARA, Muneharu YASUMOTO

要 約

自然災害におけるダークツーリズムは日本では東日本大震災以降、多くの観光関係事業者や研究者の中で取りあげられた。今までは観光は土地の魅力を見つけに行く「楽しい事」つまり「光を観に行く事」と認識されていた。しかしダークツーリズムはその正反対の意味“ダーク”を目的としたツーリズムである。この新しいツーリズムの概念や目的そしてこれからのツーリズム体系の位置づけ等を 2004 年に起こったパキスタン地震と 2010 年に起こった東日本大震災を調査して検討を加えていく事とする。

ダークツーリズムには悲しみを原点としたボランティア等の支援・復興・イノベーション・グリーンツーリズムへの変化は時間とともに、多くの新しい考え方を示している。

キーワード：ダークツーリズム、震災遺構、東日本大震災、パキスタン地震、ムザファラバード

*追手門学院大学地域創造学部教授

**追手門学院大学地域創造学部専任講師

はじめに

日本は地震や台風、集中豪雨等多くの自然災害を経験している。2011年3月11日の東日本大震災は日本国内では観測史上最大規模、アメリカ地質調査所（USGS）の情報によれば1900年以降、世界でも4番目の規模の地震であった。震災による死者・行方不明者は2万2312人、建築物の全壊・流失・半壊は合わせて40万5166戸が公式に確認された。この東日本大震災後に折り・悲しみ・ボランティア・震災遺構・震災の語り部・復興等のキーワードが色々な場所で使われたり、話題になったりした。一方、観光の専門家や研究者の間ではダークツーリズムという言葉も多く聞かれた。ダークツーリズム自体まだまだ日本の観光業界や研究者の間でも確立されている訳ではない。研究過程にあると言ってよい。同じように自然災害を多く経験しているパキスタンではこのダークツーリズムという言葉や認識は日本と同様に使われ、震災遺構や折りや悲しみの場所はそこにあり、記憶と伝承を見る事ができるかを確認する必要がある。パキスタンは2005年10月にパキスタン北東部のカシミール地域で起こった地震で7万5千人の死者を出し、家屋や道路等のインフラも壊滅されていた。

この論文は東北地方とパキスタンを訪問し、東日本大震災の被災地とパキスタン地震の被災地を訪れダークツーリズムの捉え方や認識を確認する事を趣旨に、自然災害とダークツーリズムの関係やこれからのダークツーリズムについて議論を深めていく事とする。

1. 近年のツーリズム体系とダークツーリズム

1-1 ツーリズムの概要

ツーリズムとは、一般的に観光事業や旅行業、または観光旅行のことを指す。

旅行・観光業界では「観光」より広い意味を持つ言葉として使用され、観光を含む旅行全般を意味し、観光の促進を目指す取り組みまで含める場合もある。

近年観光業界が盛り上がる中で、ツーリズムを体験型観光として位置づける動きもある。観光業界が盛り上がりを見せる近年、旅行の新たな価値を見出すツーリズムが注目されている。中でもニューツーリズムと呼ばれる人的・文化的交流や体験型コンテンツをテーマとしたツーリズムは日本人のみならず訪日外国人客からも人気を集めている。

地域が中心となっていく着地型観光モデルである。

そのニューツーリズム⁽¹⁾（ニューツーリズムの概念－平成22年3月観光庁観光産業課）は6つに分類される⁽²⁾。その分類について簡単に解説をすると

(1) 産業観光

観光を通して古くより人々の暮らしを支えてきた産業や人々の暮らしを支えていく産業につい

での学びを得ることで、背景にある文化や伝統、将来的な産業発展についての理解を深めることを目的としている。筆者は新潟県五泉市の“ニットのまちのインダストリーツーリズム（産業観光）”を指導・支援している。詳細は別論に託す事とする。

(2) エコツーリズム

屋久島の縄文杉視察や植林活動をするツアープランなどがエコツーリズムにあたり、自然環境と触れ合うことで自然との共生、環境問題についての理解を深めることを目的としている。

エコツーリズムはさまざまな環境問題が世界各地で発生しているが特に重視すべきツーリズムであるといえる。

(3) グリーンツーリズム（漁業に関しては観光庁ではブルーツーリズム⁽³⁾と呼んでいる）

農業や漁業、加工品生産などの作業の一部を実際に体験することができるツアーもあり、第一次産業に携わる人々との交流を通じた食育を目的としている。

都会生活者にとって、日常的に関わることの少ない人々との交流は新たな価値観や知見を得られる貴重な機会（体験）となっている。

(4) ヘルスツーリズム

森林浴や温泉のリラクゼーション効果に着目したヘルスツーリズムでは心身の疲労が癒されること等。医療的効能を重視したものからレジャー的要素を重視したものまでさまざまなプログラムがある。

(5) ロングステイ（長期滞在型観光）

リタイア後の年配者など時間的に余裕のある層をメインターゲットとしており、多くの地域で少子高齢化が加速する現代の日本において期待すべきツーリズムの一つである。

旅行者が長期的に滞在することにより経済効果やそれに伴う地域の活性化が期待されている。

(6) 文化観光

旅行者に対しては伝統芸能や工芸など日本の伝統的な魅力を伝えることが主眼におかれている。同時に、国内旅行者に対しては、日本の歴史や伝統の魅力を再確認する機会を与えることとなり、これにより日本の文化を守っていく意識の醸成が期待されている。現在はインバウンド旅行者にとっては人気のあるツーリズムになっている。

さらに、観光業界では、サステイナブルツーリズム、メディカルツーリズム、スローツーリズム、スポーツツーリズムがその類に入る。

観光庁が定義しているニューツーリズム「近年、旅行の新たな価値を見出すツーリズムが注目されている。中でもニューツーリズムと呼ばれる人的・文化的交流や体験型コンテンツをテーマとしたツーリズム」である。それではここで議論する“ダークツーリズム”はそのニューツーリズムととらえるべきツーリズムであるのか。あるいは観光のどの分野にも分類されるべきものではないのか筆者は疑問に思っている。日本では、東日本大震災を通して、ダークツーリズムの考え方が頻繁に記述されるようになったし、頻繁に被災地に訪れる観光客も増えている。それでは

その他の国では自然災害に対して、同じようなダークツーリズムの考え方が共通しているものなのか、或いはダークツーリズム自体の考え方が違うのかを確認して見たい。

1-2 ダークツーリズムの捉え方

1. ダークツーリズムの分類

ダークツーリズムには、さまざまな分類がある。各論文中でしばしば紹介されるが、代表的なものとして、“ダーク”の性質の観点によって区分した Stone⁽⁴⁾の7分類や Dann⁽⁵⁾の5分類、そして旅行目的によって区分した Seaton⁽⁶⁾の5分類がある。

ただ、これらの分類には戦争や事件による分類が多く、自然災害の観点はほとんど記載がない。その点、井出の考える7分類⁽⁷⁾は日本における自然災害から公害・原子力災害、人権抑圧、経済の衰退などにまでを広げた分類であり、火山や地震が多い日本では、日本のダークツーリズムの考えの方が捉えやすい。本論文を進めるにあたっては井出の分類にある自然災害の分類にある地震による被害を“ダークサイド”から確認して行く。

井出によると“ダーク”の意味は「1996年に、レノンとフォーレーが戦争や災害にまつわる場を個別に捉えるのではなく、悲劇の現場に関連する観光行動に共通性を見出した。」(ダークツーリズムの真価と復興過程 復興13号 Vol NO.1 2015.7 P 53)

様々な悲劇に関する人類の悲しみは人類共通の感情である事が確認できる。つまりダークの分類による相違と悲劇に関する人類の悲しみは共通であると理解できる。

I 自然災害

- ①地震 例：阪神・淡路大震災 東日本大震災
- ②火山災害 例：洞爺湖 雲仙
- ③台風 例：伊勢湾台風

II 科学文明のあり方

- ①公害問題 例 水俣 神通川流域 豊島
- ②原子力問題 例 各地の原子力関連施設

III 戦争

- ①市民と戦争 例：沖縄 広島 長崎
- ②多面的な視点 例：知覧 大和ミュージアム

IV 人権問題と関係するもの

- ①近代化と労働運動 例：繊維産業が栄えた地域
- ②ディアスポラ 例：北海道 鶴橋
- ③法制度 例：網走監獄 喜界島 八丈島
- ④性産業 例：天草 飛田 歌舞伎町

- ⑤社会差別 例：大阪における同和問題 各地のハンセン病治療施設

V 宗教

- ①シャーマニズムと儀式 例：うたき 恐山

- ②殉教 例：五島

VI 経済的繁栄と凋落

- ①廃墟 例：軍艦島

- ②公共事業 例：大阪 南レク シーガイア

- ③社会構造の転換 例：夕張などの旧炭鉱街

VII 事件・事故現場と安全学

- ①事故 例：御巢鷹山

- ②事件 例：秋葉原

図1 カテゴリー分類に関する井出の試案

(出展：井出 明；日本におけるダークツーリズムの可能性 P5～P6)

2. 自然災害とダークツーリズム

2-1 東日本大震災とパキスタン地震

井出の分類の中から1の自然災害について、日本と他国（本論は東日本大震災の被災地である東北地方とパキスタン地震の被災地カシミール地方のムザファラバード市）についてダークツーリズムのあり方や捉え方、これからの意義について考えてみたい。そしてこれからの観光による分類と位置づけを論じて行く事とする。

2-2 東日本大震災と震災遺構

東日本大震災は地震の揺れで建造物が倒壊し多くの被災者が出たのではなく、津波の被害で多くの建物や人命が失われたのである。当時の様子は震災遺構として保存されているものも多いが、多くは撤去されている。

震災遺構としての活用は、地域内外の人々に対して広く津波に対する脅威の発信・伝承していくことが目的である。つまり、多様な人々を当該地域に呼び込むための観光資源としての機能も有している。

東日本大震災では、大津波により倒壊した建物の保存を求める声があった。しかし、震災遺構の保存、活用には、辛い記憶を持つ人の苦悩、保存費用の捻出などが課題であった。そして、復旧、復興が進行する過程で、震災を伝承する意義や震災遺構を目的として人々が訪れるようになった。そして、震災遺構は、次世代に起こりうる災害を伝承の意義や経済的な利益をもたらす資源として認識されてきた。

こうした実態から、一度撤去した震災遺構をレプリカでの復元を検討する動きも出てきた。例えば、岩手県大槌町赤浜地区の民宿あかぶの上に乗り上げていた遊覧船「はまゆり」の様子の震災を構成に継承するためにモニュメントとして保存を求める人々もいた。しかし、2カ月後には、所有者（岩手県釜石市）が復旧の邪魔になることや余震が続き危険であることを理由に撤去・解体した⁽⁸⁾。ところが、他地域において震災遺構を活用し人々が集まる様子や震災を継承する意義が認識され始めた。これを受けて、大槌町の地元住民や県外の芸術家らが被災した民宿周辺を遺構として整備し、撤去された観光船のレプリカを作る復元運動が始まった。民宿の所有者も賛同し、資金を寄付で募る基金条例を制定し、資金を寄付で募り運動が始まった。しかし、十分な資金が集まらずプロジェクトの中止、遺構である民宿が撤去された。

復旧・復興が進み、震災を伝承する手段として、震災遺構として保存活用、その費用補助も整備されてきた。2013年に復興庁は、震災遺構にかかる費用の一部を復興交付金により支援するとした。また、2018年には、行政主体の震災伝承ネットワーク協議会を設立し、各地の取り組みの連携を模索した。その一環として、「震災伝承施設」として登録し、伝承の道『3.11 伝承ロード』としてネットワークを構成することで、東日本大震災の事実や記憶、経験や教訓を試みている。このように、震災遺構として整備することは、震災の伝承に加えて、多様な人々の訪問機会を創出する観光活用の一環ともいえよう。以下では、東日本大震災の津波被害を受けた建物の震災遺構として活用に関する視察状況を述べる。

(1) たろう観光ホテル（岩手県宮古市）

岩手県宮古市にある「たろう観光ホテル」は、1986年に建設された。東日本大震災では、6階建ての建物のうち高さ17mを超える津波がより4階まで浸水し、1・2階は完全に破壊された（写真2-1）。倒壊を免れた建物は、後世に伝承するために保存することを早い時期に決定していた。そして、2014年に宮古市が取得し、2016年保存整備工事を完了した。

保存・活用にかかる費用は、宮古市の「津波遺構保存整備事業に関する寄附金」や復興庁の「復興交付金」を利用している。

建物の外観は、無料で見学できるとともに、建物に隣接して駐車場やトイレを整備した（写真2-2）。また、館内には、宮古観光文化交流協会の「学ぶ防災ガイド」に参加することで見学できる。費用は、ガイド1名につき4,000円（1名から対応）からである。ガイドは、宮古観光文化交流協会が実施している。宮古観光文化交流協会が主催する「学ぶ防災ガイド」は、防災意識向上が目的でありつつも「体験観光プログラム」の一環として位置づけられている。そして、震災当日に同ホテルの6階から撮影された津波が襲来する様子の上映が実施されている。この映像は、たろう観光ホテルの社長が撮影したもので、マスコミへの未公開映像である。社長が津波時の映像の中には、人が流れていく様子もある。そのため公開への葛藤もあった。しかし、復興が進むにつれ、その映像を活用し伝承していくことの意義を確認し公開に至った。

2020年までの見学では、津波を受けながらも残った非常階段を利用して6階へと上がってい

た。このため、足が不自由な高齢者や障がい者などの足に不安がある人は、見学することが困難であった。そこで、総工費 1 億 345 万円をかけて別棟にエレベーターを設置し、ホテルの裏側と渡り廊下でつないだ（写真 2-3）。このように、身体的な状況を問わず、誰もが入れる環境を整備した。

「たろう観光ホテル」は、宮古市のホームページに観光の一環として「学ぶ防災」というキーワードにより取り扱われている。また、震災遺構と併せて、「三陸ジオパーク」といったキーワードからの活用も確認できる。ジオパーク⁹⁾は、地質と地域の伝統や文化などを活用する取り組みである。ここから、津波そのものが、「被災」といった事実を伝承する多様な観点から活用しようとしている。



写真 2-1 たろう観光ホテル
2021 年 9 月 筆者撮影



写真 2-2 駐車場とトイレ
2021 年 9 月 筆者撮影



写真 2-3 エレベーター（左側）
2021 年 9 月 筆者撮影

(2) 中浜小学校（宮城県山元町）

中浜小学校は、津波による被害を受けながらも、児童や教職員、地域住民ら避難者 90 人の命

を守り抜いた（写真 2-4）。海から 400 メートルと近いため、地域住民の要望から 1989 年の校舎建て替え時に津波や高潮の防災対策として、住民の避難を想定した外階段の設置、敷地全体を 2 m 程度のかさ上げを実施した。津波により、集落もすべて失われ居住禁止区域となった。それゆえ、中浜小学校は、学校から震災遺構として、復興交付金事業を活用し津波の痕跡をできる限り残し保存・活用している。中浜小学校には、元教職員や地域住民を中心に愛着を持つ人々が多く、保存・活用へのワークショップや後述する震災の語り部など、活用に向けた活動が積極的であった。

建物の外観や校庭の見学は無料であるとともに、利用者を受け入れるための駐車場やトイレ棟が整備されている。館内の見学は、事前予約等は不要で入館料（一般 400 円、高校生 300 円、小中学生 200 円、未就学児無料）を支払うことで、誰でも入館することができる。この入館料は、施設の維持管理を目的とした運営協力費として位置づけられている。建物の 1 階は、津波で破壊された様子が保存展示している（写真 2-5）。2 階は、被災直前直後の 72 時間をまとめたドキュメントパネル、震災前の街の模型などが展示されている。そして、屋根裏倉庫は、90 人が避難した当時のまゝを保存・展示している。こうした、館内の説明板や掲示物の内容掲載した「震災遺構中浜小学校ガイドブック」を 200 円で販売している。震災遺構の語り部ガイドは、「やまもと語りべの会」が、語り部一人のあたり 5,000 円（見学者 1～20 人）で実施している。



写真 2-4 中浜小学校の外観
2022 年 7 月 筆者撮影



写真 2-5 中浜小学校（1 階）
2022 年 7 月 筆者撮影

2-3 震災遺構の目的

震災遺構は、震災による教訓を被災した建物等を活用し、次世代に伝承することが目的である。被災した建物は、当時の状況がわかるように保存し、エレベーターやスロープ等の整備、多言語対応、入場料やガイド料など費用を徴収、情報発信などの取り組みなども確認できた。震災遺構の内部の展示や説明などは、防災学習を意識した内容になっている。このように、自然災害の脅威を何も知らない人に対して、興味関心を抱くよう活用していた。

地域外の人々に対する震災遺構の情報発信は、観光体験の一環として位置づけられていることが多い。

こうした実態から震災遺構の活用は、観光に対する考え方の変化を示唆するものでもある。三陸地方は、過去の津波による被害を、津波到達を示す石碑や「津波でんでんこ」といった言い伝えにより、次世代へ伝承してきた。これらは、地域外の人々を対象とした観光活用とは言い難い。それに対して東日本大震災は、小泉首相（当時）が2004年の施政方針演説の中で観光立国を宣言して以降に発生した大規模な災害であった。日本では、観光が地域振興の方策として注目され、外国人観光客をはじめ多くの人々が各地域へ訪れ観光交流の素地が築かれていた。これは、国内外から多くのボランティアが訪れ復旧、復興を下支えするものになったといえよう。あわせて、被災した建物が、観光客の訪問を促す契機となり、彼らの消費が復興に寄与するといった考えも浸透してきた。つまり、観光が被災地の復興手段として、被災地観光、ダークツーリズムやボランティアツーリズムなどと称し注目されるようになった。そして、地域内外の人々を対象に被災した建物を震災遺構として整備、活用の契機になったといえる。

復興が進むにつれ、震災遺構を活用して、人々の受け入れ、地域情報の発信、などの取り組みは、観光活用の一環と位置付けることができる。

最後に本稿で着目した震災遺構は、従来人々の暮らしの中に存在した建物である。それが、大津波による被害から、高台への集団移転やかさ上げにより、人々の居住エリアも大きく変化した。そのような中で、震災遺構を様々な観光資源と掛け合わせることで、震災の伝承と地域振興を展開していくことが、今後求められる。

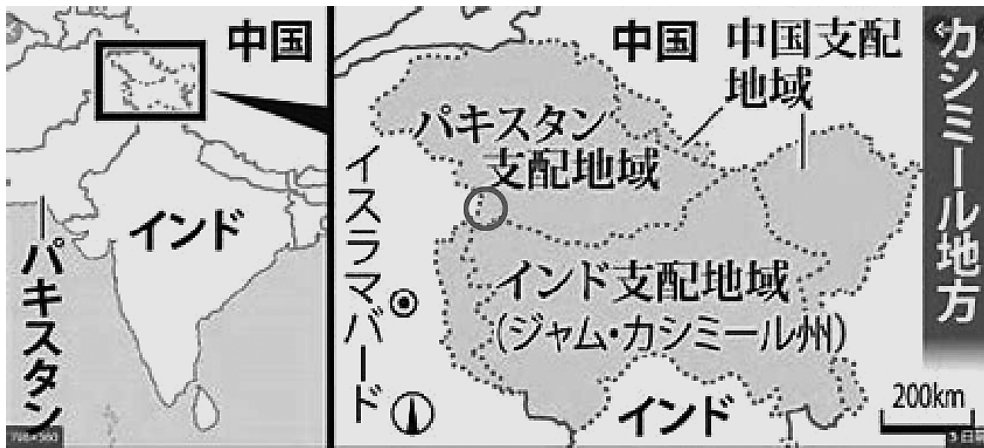
2-4 パキスタン国（カシミール特別州ムザファラバード）

(1) ムザファラバード概要

ムザファラバードはパキスタンの北東部にあるアザド・カシミール州の首府であり、パキスタンの首都イスラマバードから北東85 KMの距離にある。ムザファラバードは、2005年10月8日午前8:50に起きたM7.8の大地震の震源地であり、深刻な被害を受けた。



地図 2-6 パキスタン地図



地図 2-7 カシミール地域

ムザファラバードは、都市部としては最大の被災地（毎日新聞，2005）⁽¹⁰⁾であり、同州では死者約約 18,000 人を越えたと報道されていた（日本経済新聞，2005）⁽¹¹⁾。また、パキスタン政府によると、当時は国内の死者は 49,000 人余り、負傷者は約 74,000 人であるという（朝日新聞，2005）⁽¹²⁾報道であった。しかし現在では 73,000 人が死んだという事が公式に発表されている。パキスタンでは、死亡者や負傷者数はきっちりした住民票がないため、正確な数字は把握できていない。（2022 年 9 月 在パキスタン日本国大使館書記官）。

今回の現地調査はムザファラバードの震災地の復興の状況と現在の住民に残る“ダークサイド”の悲劇における悲しみを確認する事である。

東京からバンコク、カラチ経由でパキスタンの首都イスラマバードに到着した。

現在パキスタンには直行便はなく、経由便になる。その為、イスラマバードまで要した時間は実にほぼ 18 時間に及ぶ。（バンコク空港内 3 時間、カラチ空港近隣のホテルで 4 時間ほど滞在している）。

イスラマバードからは専用車でムザファラバードまで山道の 85 KM の距離をほぼ 4 時間の道のりであるが、避暑地の観光地や風光明媚な景色を眺めながらの調査の旅である。

ダークツーリズムの“ダークサイド”に行くまでの観光は“光を観る”つまり、地域の名物料理を楽しみ、避暑地の景観を楽しむ、いわゆる旧来の“発地型観光”そのものである。カシミール地方ムザファラバードは山間の中にあり、川のほとりにある町である。近郊の町ではアニメ「風の谷のナウシカ」の舞台と噂になった場所「風の谷」は世界的な観光地“フンザ地方”⁽¹³⁾とも遠くなく、山に囲まれた場所にある。インダス川の源流である 2 本の川にそって、町が発達している。地震の様子は「周囲の山が一気に白くなった」と語った被災者もあり、広範囲でがけ崩れが起きたことがある渓谷の地である。2022 年 9 月の旅行時はパキスタンでは雨が非常に多く、あちこちで大降水に見舞われていた。国土の 3 分の 1 は被害していた時でもあり、日本でも盛ん

にニュースが流れていた⁽¹⁴⁾。

われわれがその町へ到着する前にもがけ崩れがあちこちで起きている様子があった。

(2) ムザファラバード市内調査

ムザファラバード市街は大地震が起こった場所であり、被災地である。しかしながら当時の被災を語る震災遺構、伝承館や慰霊碑はこの町にはない。その為、ダークツーリズムとしてムザファラバードのどこに行けば、当時の様子や内容、そして復興の状況が聞けるかは分からない。その為、調査活動として当時の様子を知る者を事前に探してもらい様子を聞く調査であった。

屋台の茶屋店主「この辺りの商店は当時ひどい揺れで、建物の多くは倒壊した。ほとんどは石づくりやブロックづくりの建物が多く、木造建築の日本家屋とは大きな違いがある。現在は震災当時使用していた材料をそのまま新しい建築物に使用しているとの事であった。」ただ、現状の街並みからは、当時の震災を思いはかる事は全くできなかった。

薬屋の店主「地震直後の街並みは、道路が寸断され、状況が全くつかめない事や物資等が不足して水不足が深刻であった。当然、混乱を極めた。真向いにあった病院も大きな被害にあい、多くの死者や重軽傷の患者が横たわっていた。店主の店も被害が大きく、薬が散乱し、薬の入った瓶が壊れ、使い物にならなくなった商品も多かった。」との事である。



写真 2-7 屋台店主ヒアリング
2022 年 9 月 筆者撮影



写真 2-8 薬局店主ヒアリング
2022 年 9 月 筆者同行者撮影

(3) ダークツーリズムとしてのムザファラバード

少なくとも 73,000 人もの命が失われたパキスタンにおいて、自然災害に関するダークサイドの深い悲しみをを感じる事はできなかった。ムザファラバードはインドとの国境周辺の町で紛争が起きている特殊な地域がそうさせているのだろうかとの疑問もあった。ただ次に訪問するイスラマバードも被災地でありながら“ダークサイド”の深い悲しみをを感じる事は同様に见つける事ができなかった。

つまりパキスタンでは自然災害の被災地において深い悲しを感じ、祈りとともに伝承と学び

を後世に残すと言う考え方はないに等しい。

防災の世界では「肉体的な死とその人を知る人がいなくなってしまう事を二度目の死と呼ぶ」(井出, 2018)⁽¹⁵⁾。そんな観点から、被災後 19 年経た時間がそうさせているのか、パキスタンの国民性がそうなのかはわからない。被災そのものがあつた場所やそこがどのような被災を受けていたのかを示す碑や伝承する施設はないのである。同じように被災した首都のイスラマバードさえ同様であつた。

2-5 自然災害におけるダークツーリズム（日本とパキスタンの考え方の違い）

ダークツーリズムは観光学において比較的新しい概念である。1996 年 J・レノンと M・フォーレーによって提唱⁽¹⁶⁾されたものである。この戦争や災害の地を訪れる事は、ポンペイの遺跡の博物館（ポンペイ付属博物館）や広島原爆記念館等に訪れる観光の事である。

ポンペイの遺跡や広島記念館ではダークツーリズムが提唱された 1996 年以前にこの地を観光として訪れていた人は多い。観光の“その地”にある資源の一つとして認識されてきた。周遊する場所の目玉であり、その地の“観光資源”であつた。しかしながら、1996 年以降のダークツーリズムはその観光資源に新しい概念の意味を持たせたところに価値があると言える。



ポンペイの遺跡博物館



広島記念公園及び原爆ドーム

パキスタンや日本は自然災害が非常に多い国である。今年は大雨による、インダス川の氾濫があり、過去には 2004 年パキスタン地震があつた。日本は 2018 年 7 月の西日本豪雨⁽¹⁷⁾や 2011 年 3 月の東日本大震災があつた。

日本では東日本大震災の被災地に慰霊碑や伝承館が建立されている。その地に行くと慰霊碑や伝承館ではその日、その時に何があつたのかを資料として掲載し、ビデオで当時の様子を再現してくれる。そこでは当時の様子を臨場感とともに再現をしてくれる語り部までいる。これは今までの観光では考えられない。当時、その場所の苦しみ・悲しみを共有させてくれるホスト側からゲスト側への感情移入である。日本には復興を視野に入れた、学びが多く場所で見られた。例

例えば津波の被害から町を守る堤防の高さ（嵩上げ）や津波の到達までにどこに逃げればよいかなど。祈りや学びに深く関与している事が確認できる。一方、パキスタンにおいては祈りを捧げる場所も学びを受ける伝承館や資料館もなく、被災地近くで生活していた人、商売していた人に話を聞く事ができただけであった。被災地はすでに復興しており、昔の被災地を想像させる建物や慰霊碑等は確認できなかった。

ムザファラバードは観光資源としては風光明媚な場所であり、辺境の地域である。景観や古代の城壁跡などが観光資源として残っているが、ダークツーリズムから見たダークサイドの資源はほとんど残っていない。



写真 2-11 ムザファラバード景観
2022 年 9 月 筆者撮影



写真 2-12 ムザファラバード 古代の城壁
2022 年 9 月 筆者撮影

今回の日本の東北地方とパキスタンのカシミール地方双方の自然災害の被災地観光（ダークツーリズム）を体験・調査した。東北地方は“祈りと学び”を中心としたダークツーリズムを実感したのに対して、パキスタンカシミール地方のダークサイドの体験や学びはムザファラバードの住民のインタビューやヒアリングが中心であり、悲しみを偲ぶ場所や慰霊碑はパキスタンでは確認できなかった。

今回は被災地をインタビューしながらパキスタン地震を確認する調査目的型のツーリズムであった。ただ、ムザファラバードやイスラマバードでは、宗教、観光資源、食等を中心に観光資源を周遊した娯楽性の強い物見遊山的な内容が多かったような気がする。

3. ダークツーリズムの変化

3-1 東日本大震災のダークツーリズムの変化

ツーリズムは旅行・観光業界では「観光」より広い意味を持つと言われている。「観光」は光を観る事であり、ダークツーリズムの「ダーク」とは意味が正反対である。はたして、分類としては、観光分野に分類されるのかもわからない。本来「観光」は“楽しいもの”“愉快なもの”をとらえている事が多い。一方でダークツーリズムは死や災害を扱い“悲しみ”や“苦しみ”を

中心に据えている。井出は「人間のつらい体験を敢えて観光対象とした新しい観光カテゴリー」として捉えている⁽¹⁸⁾。

東日本大震災のダークツーリズムは復興と深く絡んでいる。被災当初はボランティアで多くの人が被災地に入り、被災地の多くの人との交流の中で、悲しみにより添いながら労力で地域に貢献した。間中はこの復興の可能性のあるボランティアの貢献を“ボランティアツーリズム”⁽¹⁹⁾と表現している。同時にこの被災初期のボランティアを前提とした復興過程から現在はグリーンツーリズムの進展も見られる。特に亘理町のいちご団地は復興のシンボルとされているように地域で新しい展開のイノベーションが起こっている。

このようにダークツーリズムは被災地「死や苦しみと結びついた場所」⁽²⁰⁾を訪れる行為であり、悼む・学・記憶する事を主眼においたツーリズムである。間中が「ダークツーリズムの成功がグリーンツーリズムやアドベンチャーツーリズム等の多様な観光の展開につながって行く」⁽²¹⁾と述べている通り、災害の時間的広がりとともにボランティアや研究者等ゲスト主体のツーリズムから現在はホストを主体としたツーリズムへと主役が変わってきている。

3-2 ニューツーリズムとダークツーリズム

ニューツーリズムは観光庁では旅行の新たな価値を見出すツーリズムが注目されている。中でも「ニューツーリズムと呼ばれる人的・文化的交流や体験型コンテンツをテーマとしたツーリズム」⁽²²⁾であるとしている。この概念は平成22年3月に発表された。

その1年後に東日本大震災は起きた。東日本大震災は多くの研究者によってダークツーリズムの名前が頻繁に取り上げられた。つまり、ダークツーリズムはニューツーリズムなのか、全く違うツーリズムなのかははっきりしない。ただ「新たな価値を見出すツーリズムであり、人的交流や体験コンテンツをとまなうツーリズム」である事は確かである。

4. おわりに

ダークツーリズムは新しいツーリズムの考え方であり、今まで日本が見て、行ってきた、そして経験した観光とは全く違う観光類型である。東日本大震災時にはあまりにも大きな犠牲者を出してきた地域では、「ダーク」と言う言葉自体が憚られる事もあった。

そして、10年以上の時間が経過し、その悲しみや辛さから少しずつ解放されてきている。ただ、今だからこそダークツーリズムの行程の中で忘れてはいけない悲しみや学びの価値を語り継ぐ事が重要と言えるのではないか。

注

- (1) 観光庁(2010)ニューツーリズム旅行商品 創出・流通促進 ポイント集 P2~3

- (2) 観光庁（2010）ニューツーリズムの概念 2-1 P 2～4
- (3) 国土交通省（1996）と水産庁は共同で、島や沿海部の市町村の活性化を図り、国民に余暇活動の場を提供できる“漁村滞在型余暇活動（ブルー・ツーリズム）”を推進するための小冊子「ブルー・ツーリズム推進のための手引き書」
- (4) Stone PR. A dark tourism spectrum: towards a typology of death and macabre related tourist sites, attractions and exhibitions. *Tourism*. 2006; 54(2) : 145-60
- (5) Dann GMS. The dark side of tourism. *Etudes de Rapports, Serie L. Vol.14*. Aix-en Provence: Centre International de Recherches et d'Etudes Touristiques; 1998.
- (6) Seaton AV. Guided by the dark: From thanatopsis to thanatourism. *International Journal of Heritage Studies*. 1996; 2(4) : 234-44
- (7) 井出 明. 日本におけるダークツーリズム研究の可能性. 第 16 回進化経済学会（大阪）. 2012 年 3 月 17 日
- (8) 島川崇（2012）被災惨禍の観光資源としての保存過程における住民意思の変化と首長・議会の役割ー広島・原爆ドームを事例にー 日本国際観光学会論文集 第 19 号 pp.27-31 日本国際観光学会
例えば、島川（2012）p.27 では、当時の状況について『あの忌まわしい震災を思い出したくない』と多くの住民が思っていたことや、実際に強震度の余震が続いていたことから崩落の危険性があり、復旧作業の妨げになることが主張され、震災後 2 ヶ月で早々と撤去された。これに対しては中田高広島大学名誉教授のグループから津波惨禍の風化を防ぐためのモニュメントとして保存するべしとの議論が起こったがそのうねりはあまり大きくはならなかった」と状況を整理している。
- (9) 日本ジオパークネットワーク HP によると「ジオパークとは、地球科学的意義のあるサイトや景観が保護、教育、持続可能な開発のすべてを含んだ総合的な考え方によって管理された、1 つにまとまったエリアです」と定義している。
2023 年 1 月 29 日閲覧
- (10) 毎日新聞, 2005, 10 月 12 日朝刊.
- (11) 日本経済新聞, 2005, 10 月 14 日朝刊
- (12) 朝日新聞, 2005, 11 月 4 日
- (13) 旅行人ノートアジア横断（旅行人編集部 2002 年 8 月にはフンザ地方が風のナウシカの場所と記載されたが、スタジオジブリからは正式に発表された訳ではない。改定版以降は削除されている。
- (14) 朝日新聞、朝日デジタル 2022 年 9 月 16 日
- (15) 井出 明 ダークツーリズム（悲しみの記録を巡る旅）2018 年 7 月 P 21～22
- (16) Lennon, J. J., & Foley, M. (2000). *Dark Tourism, Continuum*.
- (17) NHK アーカイブ.
http://www2.nhk.or.jp/archives/311shogen/disaster_records/detail.cgi?das_id=D0010060260_00000
- (18) 井出 明. 日本におけるダークツーリズム研究の可能性. 第 16 回進化経済学会（大阪）. 2012 年 3 月 17 日 井出はダークツーリズムを新しい観光カテゴリーと捉えている。
- (19) 間中 光. 災害復興における観光の役割と課題 インドネシア・ムラビ山噴火災害を事例としたダークツーリズムの再定位 観光学評論 Vol.5-2（2017）P 217
- (20) 遠藤英樹（1995）パフォーマティヴなダークツーリズムの可能性 P 220
- (21) 間中 光. 災害復興における観光の役割と課題 インドネシア・ムラビ山噴火災害を事例としたダークツーリズムの再定位 観光学評論 Vol.5-2（2017）P 226
- (22) 観光庁（2010）ニューツーリズムの概念 2-1 P 2～4

2023 年 1 月 31 日受理